

第13回「日本語大賞」

テーマ「 」に伝えたい言葉

一般の部 優秀賞 受賞作品

ゆっくり休んでな

兵庫県
野村 徹

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

妻の父親、つまり私の義父は八十七歳になるが、年齢のわりには足腰がしっかりしていて、日に二キロの散歩を日課とし、二ヶ月に一度は公務員時代のOBたちとの飲み会を楽しんでいた。

そんな義父だったが、年齢のせいもあり食が細く、徐々に痩せていった。私と妻は月に数度は妻の実家、義父の家へ行き、一緒に食事していた。そんな時、妻はいつも

「これだけは食べてな、しっかり食べないと！」

と義父に食事を残さないよう言っていた。妻としては、食わずに痩せていく義父に対して心を鬼にして言っていたのだろう。だが、普段から食事というものに拘りも執着もなく、モリモリ食することもなかった義父としては、食事というものに対して嫌気がさしていたようである。

一月中頃のことである。義父が誤嚥による軽度の肺炎で入院することになった。高齢者によく見られる症状である。

義父が入院してから一週間が経ち、退屈な義父のために何か時間つぶしになるものはないかと妻と共に考えた末、クロスワードパズルをしてみようということになった。やり方は単純。クロスワードパズルの懸賞が掲載されている専門雑誌を買って義父に渡し、一週間後に義父が解いた分のパズルの答えを私がパソコンで懸賞へ応募するというものであり、それを一週間毎に繰り返すものである。

クロスワードパズルの懸賞が掲載されている専門雑誌は毎月発行のもの、奇数月に発行されるもの、偶数月に発行されるものなど何種類もあり、一ヶ月の間にもかなりのクロスワードパズルに挑戦することができる。

「今日からこのクロスワードパズル、解いてみて。パパ、こんなんで得意やろ」

妻が義父にクロスワードパズルの専門雑誌を渡して言った。

「得意ってことはないけど、面白いんか？」

義父はまんざらでもないような反応をしていた。こうして義父によるクロスワードパズルの挑戦が始まった。

クロスワードパズルを毎週やることで義父は暇つぶしとともに日々の小さな楽しみになっていったようである。様子見に行っていた私には義父の表情からそれがわかった。義父は公務員をしていたこともあり、真面目で色々物知りであり、クロスワードパズルはちょうどよかったのだろう。

私と妻が義父の様子見に行くと、妻はお決まりの挨拶をしていた。

「どう？ どこかしんどいところない？」

「大丈夫や。いつもわるいな」

義父もまたお決まりの返事をしていった。

高齢者の誤嚥による肺炎はなかなか熱が下がらず、微熱が続いていたにもかかわらず、義父はその弱った身体を起こして会話をしてくれていた。

「パズル、どこまで解いたん？」

妻が義父に聞くのもまた当たり前前よりやり取りになっていた。

「今日はまだしてないから、昨日までの分や」

義父はベッドの横に置いてあったクロスワードパズルの雑誌を差し出した。

「今まで解いた問題、当たってるんか？ 今度、正解教えてな」

「パパはいろいろ知ってるから全問正解やる。何か当たったらちようだいな」

「欲出したら、当たらんわ」

義父と妻は他愛もない話をしていたが、私は義父が解答を書き込んだクロスワードパズルの雑誌を持って病院の談話スペースへ行き、持ち込んだパソコンからクロスワードパズルの懸賞サイトへ義父が解いたパズルの解答を入力した。真面目な義父らしく、毎週、クロスワードパズルの専門雑誌にはしっかりと解答が書き込まれていた。

義父が解いたクロスワードパズル、おそらくほとんどの解答は正解だろう。だが正解でも抽選という運がなければ懸賞には当たらない。「十問に一つくらいは抽選に当たればいいのに」、私は義父が解いたクロスワードパズルの解答をパソコンに入力するたびに、そんなことを考え、抽選に当たる運を願っていた。

義父の入院は二ヶ月近く続き、義父に渡したクロスワードパズルの専門雑誌も五冊になっていた。だが義父は誤嚥による肺炎を繰り返すようになり、食事は点滴に変わってしまった。そして三月の中頃から義父はクロスワードパズルを解く力もなくなり、かなり弱っていった。義父がクロスワードパズルを解かなくなって半月、義父は眠るように旅立った。まるでロウソクがなくなり、火がゆつくりと消えるように義父は静かに旅立った。まだ肌寒い四月になったばかりの日だった。

義父が旅立って三日後、義父の葬式でのことである。私は時の移り変わりばかり考えていた。わずか数ヶ月前まで元気だった義父があつという間に旅立つという時の流れが妙に悲しかった。妻は気丈にしているようにも見えたが、その日に限っては妻の身体にはどこか温かみがあり、優しさが出ているようにも見えていた。

出棺の前、妻が義父に語りかけていた。親子二人だけの会話である。

「パパが解いたパズルでスチーマー、当たったよ。よかったね」

私はその親子の会話を聞き、思わず妻の両肩を後ろから抱きしめていた。

義父が旅立つ二日前、義父の家のポストには宅配便の不在票が入れられていた。私と妻は不在票の存在を義父が旅立った翌日に気づき、その日のうちに再配達してもらっていた。宅配便はクロスワードパズルの懸賞品としての衣料スチーマーであった。宅配便の包み紙をほどいた妻はすぐに事を察知したようだった。

「当たったんやわー」

妻は宅配便で届いた懸賞品の箱をその胸元に抱きしめていた。私の目にも妻が抱きしめた箱に書かれた「スチーマー」の文字がハッキリと認識できた。

クロスワードパズルを解いた者が旅立った後、抽選で当たった懸賞品が到着するという残念な結果であったが、真面目で物知りの義父はちゃんとクロスワードパズルを正解し、そして運もあり、懸賞品を当てていた。

私には妻が自分の父親に語りかけていた「当たったよ」という言葉、優しい報告があまりにも愛しすぎた。私には妻がより愛おしい存在になった瞬間だった。「ゆつくり休んでな」、私は妻にその言葉だけをかけてあげたい。